

様々な考古学——奈良大学文化財学科考古学の授業から(2)——

酒 井 龍 一

はじめに

本稿は、様々な考古学に対する基本的な認識を解説し、日頃の学習・訓練活動を合理的に進めるための目安を提供するのが目的である。

については、考古学の学習過程を前半期(基本段階)と後半期(応用・総合段階)に区分し、前半期では考古学そのものを、後半期では考古学以外の学問・専門分野や技術等を学ぶ必要性を強調する。

問題の所在

考古学全体のなかには、「先史考古学」・「実験考古学」・「動物考古学」、あるいは「セトルメント アークオロジ」・「エスノアークオロジ」・「人類学的考古学」を始め、様々な考古学がある。考古学を学ぶ者は、まず自らの性格・資質・能力・技術や考古学以外

の得意な学科等をよく認識し、それに応じた考古学を選択すること、すなわち自分に適した考古学を選択することが望まれる。

その理由は、指向する考古学により、学べき学問・専門分野や技術等が個々に異なるからである。例えば、動物考古学は、考古学の基本に加えて更に動物学や骨格資料分類学、また人類学的考古学は、考古学に加えて人類学を学ぶことが不可欠となる。しかしそれを実現するには、次のような現実的な制約がある。

各種の考古学は、各種の学問・専門分野からの様々な考え方・理念・知識・情報・方法・理論・概念・技術・分析法・道具・設備等に支援され、個性的に存在する。問題は、考古学を支援する学問専門分野の大多数が、歴史学(文献史学)を除き、自然科学や理学的分野、あるいは社会科学の分野等に由来することにある。また、統計のような数理学的な分析技法やコンピューター等の技術についても同様である。従って、同じ文学部や史学科内に考古学と共存する歴史学は別として、考古学が属する人文系の履修体系の中ではそれらを学べないというネ

ガティブな条件が与えられる。

例えば、動物考古学を専攻する場合、考古学は自らの学科で学べるのは当然だが、動物学や骨格標本分類学はそのカリキュラムの範囲では学べず、別にどこか理学系の場に訓練を求めざるをえない。それが人類学でも、地理学でも、生態学でも、コンピュータのプログラミングや、エックス線撮影でも事情は同じである。また、考古学プログラムの立場で単に石器や土器を研究する場合でも、型式学的研究は自らの環境で可能としても、石材や胎土の科学的分析や産地特定はやはり別の専門家のもとの訓練が必要となる。遺跡分布の空間分析的研究の場合は、地理学の中心地理論や立地分析等、更に文科系が苦手な数学的手法も学ぶ必要がある。まして、人類や農耕の起源の解明となると、考古学以上に、前者では形質人類学、後者では古植物学が必要で、かついづれも文科系の環境では学習不可能という深刻な事態に直面する。

考古学の二段階

考古学全般は、第一段階の基本考古学と、第二段階の応用あるいは総合考古学に大区分される。先ず基本考古学は、考古学的考古学あるいは考古学プロパーと称されるべきもので、考古学固有の方法・理論・

一段階

二段階

基本考古学

↓

応用・総合考古学

概念・分析法等だけを限定して使用する段階の考古学である。これに對して、応用や総合考古学は、基本考古学と考古学以外の学問的・専門的分野や技術等を合体させる段階の考古学である。

基本考古学

ここで、考古学の基本とは何かという問題がでてくる。考古学の観察対象は、いうまでもなく遺跡や遺構や遺物であり、それらを発掘という手段で地中から考古資料・情報として取り出す。その研究方法は、考古資料を観察し分類し、編年また地域性を確定する、いわゆる「型式学」を基本とする。従って考古学の基本とは、考古資料を観察対象とし、それらを型式学で分析すること、と規定づけられる。これを骨子に、あらゆる遺跡や遺物個々、あるいは考古学一般・研究者・研究史等に関する個別・具体的な知識や情報が付加され、基本考古学一般として形成されるのである。

基本考古学

- ・ 型式学についての知識
- ・ 考古学の基本用語や概念等についての知識
- ・ 遺跡や遺物の調査・研究方法についての知識
- ・ 遺跡・遺物全般についての知識
- ・ 研究者・研究史についての知識

応用・総合考古学

この段階以降の考古学が応用あるいは総合考古学であり、もはや考古学単独だけでは成り立たないことに特徴がある。この段階に進むと、基本考古学を踏まえて、その他の学問・専門分野の方法や理論や概念や分析法等を援用する。簡単に言うと、基本考古学＋考古学以外の学問・専門分野⇨応用・総合考古学となる。考古学とそれ以外の様々な領域を異にする分野を結合させて後半段階の考古学となる。

従って当然、援用される学問・専門分野により、多種多様の考古学が創出できる。人類学を援用すれば人類学的考古学、文献史学を援用すれば歴史学的考古学となる。それらはすべて、応用段階における特定の考古学である。この段階では、研究者は、考古学以外の何か学問・専門分野や技術等を修得することが不可欠である。

応用考古学 基本考古学＋何か特定の学問・専門分野や技術

ところで、考古学プロパーによる応用考古学は可能なのか。それは不可能である。考古学の基本はあくまで型式学であり、それ以上のものではない。

別に、「総合考古学」として、後半段階に進む場合もある。これは、考古学の領域の中だけでは実現せず、様々な学問的・専門的分野に支

援された特定考古学からの研究結果や情報全般を、考古学者が主体的に総合・統合し、過去の人間の社会・文化等を始めとするあらゆる項目の復元モデルに組み立てる、というものである。「あらゆる各種の特定考古学の成果」を考古学者が総合・統合することに、この段階の特徴がある。そうした作業を実際的に可能とするには、担当する研究者が考古学とそれ以外の様々な学問・専門分野に精通していることが不可欠であることは言うまでもない。

総合考古学⇨基礎考古学＋様々な学問・専門分野や技術

プログラム

前半期の基礎考古学から、後半期の応用考古学・総合考古学等への一般的手順は、おおむね次のようになる。

手順1 考古学の専攻決定

- 2 考古学一般（基本考古学）の学習・訓練
- 3 考古学プロパーでいくか、それ以外の特定考古学を目指すかの選択

- 4 各種考古学の中から特定の考古学を限定（特定考古学）
- 5 特定考古学を支援する学問・専門分野を確認（動物学と

か、歴史学とか、情報科学とか、分析技法とか)

6 考古学以外の分野の訓練可能な専門家・研究室・学科・学部・大学・研究機関等の選定(独学でも可能)

7 考古学と考古学以外の学問・専門分野の学習・訓練

8 基本考古学+特定考古学の結合(応用考古学)

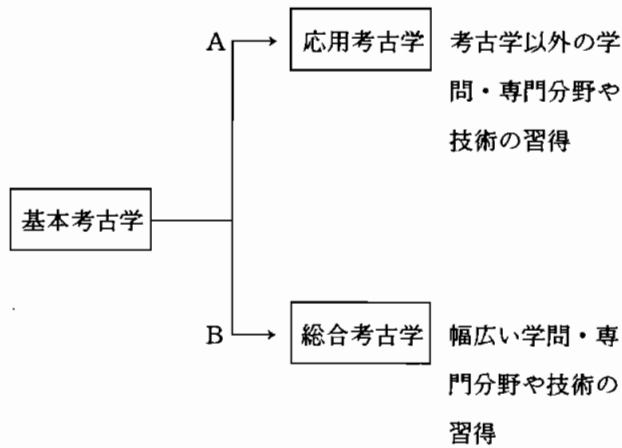
9 応用考古学の実践

10 基本考古学・あらゆる特定考古学の統合(総合考古学)

考古学研究者の進むべき道は、基本的にはA・Bコースの二つある。

一つは、基本考古学を踏まえて「特定の諸学問・専門分野」等を学ぶ「Aコース」、
「幅広い学問・専門分野」等を学ぶ「Bコース」の道である。

前者は、基本考古学と何か特定の学問的・専門的分野等を結合させ、「学的考古学」として特定の応用考古学をするものである。この道は更に複雑に枝別れしており、選択すべき学問領域は大きくは次の4方向ある。



第1は歴史学的方向、第2は自然科学的・理学的方向、第3は社会的方向、そして第4は技術・技能的方向である。

両コースの選択は、先にあげた手順2、すなわち基本考古学の学習・訓練が進展した時点でされるのが一般的である。

様々な考古学

ここで、どのような特定の考古学が実際にあるのかを知るため、身近な文献の中から様々な名称の考古学をみつけ、順不同で列挙する。もちろんこれ以外にも様々な考古学がある。

先史考古学・工業考古学・歴史学的考古学・聖書考古学・環境考古学・古典考古学・実験考古学・宗教考古学・空間考古学・民族考古学（エスノ アークオロジ）・数理考古学・分析考古学・コンピュータ考古学・野外考古学・水中考古学・行動考古学・動物考古学・地理学的考古学・植物考古学・セトルメント アークオロジ・構造考古学・人類学的考古学・現在物質文化研究・社会的考古学・天文考古学・想念の考古学・人口学的考古学・科学的考古学・ニュー アークオロジ・サルベージ考古学・伝統的な考古学・銅鐸の考古学・集落考古学・考古学的考古学・貝輪の考古学・墳墓の考古学・マルキスト考古学・人間主義的考古学・批判考古学・象徴考古学・等々。まだまだある。

考古学とは

今一度、考古学について整理しておこう。

考古学一般は、過去の人間の行動痕跡である遺跡・遺構・遺物、およびそれらが存在・分布する空間を観察対象とし、過去における人間の文化・社会・経済・政治・思想・生業・生活・宗教・心理・事件・行動・人間関係・対自然関係等、様々な事象を個々に復元し、更にはそれらを空間的・時間的に整理・配列、モデル化して、いわゆる人間の「歴史一般」を理解することを目的とする。加えて、様々な考古学的現象についての空間的な変異（個性）や時間的変化の個別・一般的要因を、合理的に説明することも不可欠とする先進的な意見もある。

とにかくも考古学とは、遺跡の発掘により得られる考古資料や考古学的状況についての情報をデータとすることが、先ず基本となる。考古学一般は、これを共通基盤としながら、実際には観察対象の種類や観察方法、あるいは復元方法等に多様性があり、結果として多様な考古学がうみだされる。

基本考古学である考古学的考古学（考古学プロパー）の立場を解説しておく。考古学的プロパーは、各種の遺跡・遺構・遺物・空間（考古資料）を観察の対象とし、そこから導かれた素材情報（データ）を、考古学的Ⅱ型式学的に組み立て、モデル構成して過去を理解する方法

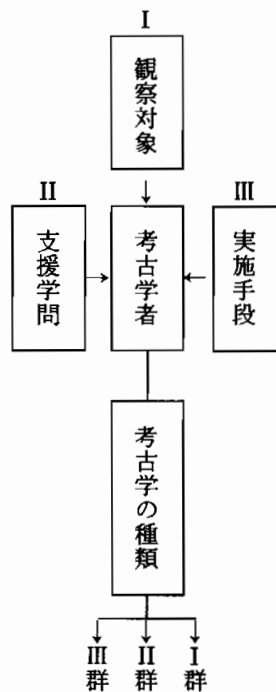
をとる。このとき対象になる考古資料は、特にその種類が限定されることはない。むしろ、あらゆる考古資料が対象となる。しかし厳密には、遺跡・遺構・遺物・空間という基本的な考古資料のうち、ある種の遺物||自然遺物に対しては情報収集能力の点で重大な弱点を持っている。

考古学の基本的方法は、いわゆる「型式学」である。具体的には、あらゆる考古資料を肉眼で観察し、分類し、時間的・空間的關係として体系づけるという方法である。層位学と型式学を組み合わせて更にバージョンアップした、「セリエーション」という高度な型式学もこれに加わる。このように、考古学的プロパーは、自然遺物を除く各種の考古資料を観察の対象とし、それらから様々な素材情報を入手し、考古学的手法である型式学によりモデル化をする方法をとる。

考古学の3カテゴリ

様々な考古学や多様な考古学の名称がうみだされるのは、次の3要因である。すなわち観察対象や入手する情報(データ)の種類による要因I、および研究を支援する学問分野や専門分野による要因II、そして利用される手段(分析方法・技術・設備・機器等)による要因IIIである。これらいかんで、上に掲げた様々な考古学の個性や名称が決定される。

様々な考古学は、こうした観点から、主に観察対象に規定されるもの、主に支援学問に規定されるもの、そして実施手段に規定されるもの、の3者に大別できる。それぞれ「I群」・「II群」・「III群」に区別しておこう。もちろんこれら3要因は相互に關係し不可分であった、区分することに重大な意味はない。しかし、様々な考古学の主要因を把握し、その特性を理解することは、その考古学を合理的に実施する目安となる。なお、どの種類の考古学を指向するか、すなわち研究戦略の決定は、当然ながら研究者個々が選択する。



先に紹介した考古学プロパー(考古学的考古学)は、自然遺物だけに対応が弱いという条件があるものの、特に限定することなく、可能な限り「あらゆる考古資料」を観察の対象にする。そして、「型式学」を主とする「考古学」を支援学問として利用し、観察手段は研究者の「肉眼」による。そうした意味では、考古学的考古学は、型式学||考古学を支援学問とするII群と理解するのが合理的であろう。

観察対象が限定された考古学

様々な考古学の中には、冠名称が、明確に観察対象を限定・明示するものがある。例えば「動物考古学」は、出土する動物遺体を観察対象とすることで特徴づけられる。これがI群の考古学である。同様に「先史考古学」は、その地域で文字記録が出現する以前、すなわち先史時代の遺跡を研究対象とする考古学である。また「水中考古学」は、水中の遺跡・遺物を調査し研究することを特色とする。エスノアーケオロジ（民族考古学）は、地球上で生活している人達の生活ぶりや、それに直接かわる住居や道具類や食料等、様々な物質文化との関係性を、考古学者自身が観察をする。

更に対象物を限定する考古学もある。例えば、銅鐸を研究対象とする「銅鐸の考古学」、縄文土器を対象とする「縄文土器の考古学」、貝輪を研究する「貝輪の考古学」等々、多種多様に設定できる。産業考古学・集落考古学・墳墓の考古学・空間考古学・現代物質文化研究等はいずれもこの類の考古学である。

第1群考古学は、冠名称により観察対象が限定されるが、それをいかに研究するかという研究方法（支援学問や施手段）は限定されないのが通例である。縄文土器の考古学でも、縄文土器の形状を型式学的に研究しようと、その胎土を分析機器を使い科学的に研究しようと、

どちらも「縄文土器の考古学」にはちがいはない。「水中考古学」であっても、水中から引き上げた遺物を型式学的に研究しようが、科学的に分析しようが基本的には自由である。動物考古学でも、出土する動物資料の分類に主眼を置くことも可能だし、骨に残る人為的なキズを観察しその解体技術の復元を試みたり、高度な機器を用いて骨を科学的に分析しその栄養状態を追及することも可能である。

観察対象の限定

↓
研究方法の選定

↓
研究手段の限定

様々な研究方法があることを、「銅鐸の考古学」を例に解説する。

銅鐸の形状を肉眼で観察し、分類し、編年し、地域性を特定するという一連の研究は、佐原真が代表的にしてきた。これは銅鐸の「考古学的」研究であり、考古学の基本方法である「型式学」を主な手段とする。銅鐸の原料に含まれる鉛同位体比による原料産出地の特定という馬淵久夫の研究は、「日本電子社製MSORFB固体用表面電離型質分析計」という高度な分析機器を用いた、銅鐸の「科学的・分析的」研究である。また、北ベトナムの訪問し銅鼓の使用種族等の観察から、わが国の銅鐸の機能や使用方法を類推する松本清張や大林太良等の作業は「民族学的」研究であり、銅鐸の重さと高さの関係を統計処理した内田俊秀の作業は、銅鐸の「計量学的・統計的」研究である。この他にも様々な研究方法がある。

観察対象が限定されると、次に必要なのは、研究方法Ⅱ支援学問の限定である。ついでには、観察対象のもつ特性と自らの資質を考へての選択が可能である。そして、支援学問が決定すると、研究手段はおのずから限定されてくる。なぜなら、各学問・専門分野では研究手段が既に確定しているからである。土器研究を例にとると、考古学を支援学問に選定すると型式学的分析が、また理学的考古学では直ちにしかるべく科学的機器を用いて胎土分析が、人類学的考古学では土器を使用している人間集団の人類学的調査が実施されるのである。

支援学問が限定された考古学

これに対し、冠名称が支援学問を明示する考古学も多い。例えば「歴史学的考古学」や「生態学的考古学」や「地理学的考古学」等である。これらはいずれも、歴史学的方法、生態学的方法、あるいは地理学的方法を用いた考古学と理解できる。2群カテゴリーの考古学は、考古学をどんな立場で実施するかの方法Ⅱ支援学問が明示される特徴がある。

各学問分野では、研究の方法や手段や観察視点や理論や概念等が確として存在する。例えば、歴史学（文献史学）は文献資料の解説を基本的な手続きとする。よって、歴史学的考古学は、文献資料からの情報を考古資料の調査・研究に積極的に援用することが前提となる。生

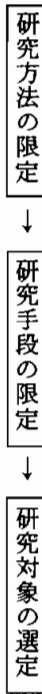
態学的考古学は、人間集団と自然環境との相互関係を研究視点として、また地理学的考古学は、中心地論や立地分析を始めとする重要な理論や分析方法を、それぞれ考古学へ援用することが共通認識となる。同様に、先の考古学的考古学・人類学的考古学・社会学的考古学・人口学的考古学・マルキスト考古学等々は、いずれも研究方法が明示されたII群カテゴリーの考古学である。

より高度になると、複数の支援学問により規定されている考古学もある。例えば、「ニューアークオロジ」は、進化論的観点・一般システム理論・論理学（演繹論的推論）の3分野を支援学問とする考古学であり、「セトルメントアークオロジ」は、人類学・生態学・空間分析・地理学を主たる支援学問とする考古学である。

当初に支援学問が確定すると、必然的に使用すべき手段が限定される。歴史考古学だと文献の解説能力であり、解説能力のなきものはこの立場の考古学を断念するか、反対に能力を修得するかかの二者択一を迫られる。生態学的考古学であれば、各種の自然遺物類（エコファクト）に対する鑑別・同定能力が重要になる。ここでも、その能力なき者はこの立場をあきらめるか、鑑別方法を修得するかのどちらかとなる。地理学的考古学では、重力モデルやティセンポリゴン法等に代表される各種の空間分析や立地分析、あるいは数学的な計算手段を学ぶ必要がでてくる。同様に、考古学的考古学では型式学が、マルキスト考古学では史的唯物論の基本概念を、人口的考古学では社会や自然環

境の人口包容力の算出能力をマスターし、これらを手段として分析を進めていく。いずれもその手段は支援学問毎に既存しており、考古学研究者自身はそれらを創出しなくとも、支援学問から学びとれる。

こうした経過を踏まえて、最後に観察対象が選定される。既に明らかのように、このカテゴリーの考古学は、研究方法等は明示されるものの、観察対象は逆に明示されてはいない。歴史学的考古学をするには、何を観察対象に選択する必要があるのか、人類学的考古学では何を観察対象にするのが合理的なのか、地理学的考古学は何を観察対象にすべきなのか等の論議と実際の限定が不可欠となってくるのである。



研究手段が限定された考古学

これらの他に、Ⅲ群カテゴリーとして、「コンピューター考古学」や「計量考古学」や「分析考古学」、あるいは「野外考古学」等のように、冠名称が、使用すべき手段や方法や機器等を明示する考古学がある。「顕微鏡考古学」や「ポーリング考古学」、あるいは「花粉分析の考古学」や「脂肪酸分析の考古学」等は、いずれもこのカテゴリーの考古学である。「赤外線カメラの考古学」や「エックス線カメラの考古学」もある。

これらはすべて実施手段等は限定されているが、観察対象や支援学問等は限定されてはいない。むしろ、コンピューターを使うこと、数学的・統計的処理をすること、高度な分析機器を使うこと、あるいはフィールドで考古学をすること等々、それぞれその手段だけは明らかである。こうした考古学を指向する立場では、当然ながら、そうした技術的手段を修得することが不可欠となる。ただし、コンピューターが好きな人も、数学が好きな人も、機器の使用に熟練している人も、フィールドが好きな人も、その手段を使いどんな支援学問を利用し、何を観察対象にするかは選択しなければならない。それには、その手段や方法や機器等の持つ特性を把握すべきことは言うまでもない。



おわりに

以上、様々な考古学を進めるうえで必要な若干の認識と目安を提示した。最初にも述べたように、考古学をするには、考古学およびそれ以外の学問・専門分野あるいは技術的手段等を修得することが不可欠である。